教科でキャリア教育

▼不破高校（岐阜・県立）

第56回 国語

今号の先生

国語
早野賢謙（まさあき）先生

大学院で国語教育について研究し、修了後、講師を経て岐阜県の高校教員に。大学院時代より要約の方略習得について研究し、現在は国語の学習への生成AIの活用についても実践のなかで模索している。現任校では進路指導主事を務める。

生徒×教師×AIで、言語活動に取り組み 言葉を自分のものにしてこの世界を探究する

テクノロジーの進展も踏まえ 生徒が自ら学んでいけるように

「古典探究」の授業で、岐阜県立不破高校の3年生は、歴史物語『大鏡』の読解に挑んだ。早野賢謙先生の作成したワークシートの設問に答えるために、おのおのが手持ちのタブレットで、検索サイトや辞書、生成AIまで駆使して考える。

読解において着目したのが「敬語」だ。尊敬・謙譲・丁寧の3種類があり、「誰から誰への敬意か」をつかむのが重要であることを先に学んだ。それを踏まえて重要単語や文法を調べ、どの文では誰から誰に敬意が向いているか解き明かし、最終的に物語の登場人物の関係図を作る。

ある生徒は、重要単語の読み方を知ろうと、『大鏡』を音読したサイトを見つけ、音声を生成AIに文字起こしさせようとした。別の生徒は、本文の意味をつかむために、『大鏡』のテキストを撮影し、その画像を生成AIに訳させようとした。知りたいことにどうアプローチするかは自由に考えていい。早野先生はどんなやり方も否定せず、むしろ生徒の試みがどうすれば成功するかを一緒に模索した。

人物関係図そのものを生成AIに出させることに成功した生徒が「先生、わかりやすい関係図が出てきた！」と声をあげた。「正しいかどうかはどう確認したの？」と早野先生。「出典は、ない」と生徒が笑う。参考にはできても、鵜呑みにはできないことをわきまえていた。

こうした授業で生徒に習得してほしいことを、早野先生は次のように語る。

「答えはわからなくても『その答えを見つける手順はわかっている』状態になってほしいと思っています。勉強に苦手意識をもつ生徒もいますが、社会に出た後も『必要なことは自分で学べる』という自信を手にして前に進んでほしいのです」

自分で学ぶ一手段として、授業では生成AIも積極的に活用することにした。

「生徒は日常で既に生成AIを使っています。私も使い倒してみて、『これは使える』『でも使い方を間違えると危うい』と感じました。生成AI抜きの世界にもう戻れないなら、生徒がこの道具を適切に使えるようにしたいのです。日々の学びに生成AIをどう生かすか、そこから生徒と一緒に考えることを大事にしています」

受け売りの言葉ではない 自分の実感がこもる言葉を

「国語表現」の授業では、3年生が自分のライフヒストリーを描くことに挑んだ。過去を振り返り、未来を想像し、自分の一生の「目次」を立てたうえで、文章を作成し、写真や画像も入れて15枚のスライドにする。その創作を生成AIも活用して進める。

早野先生は教室を巡りながら、一人ひとりの状況を把握し、図1のように個別に対応した。生成AIを使うにあたり、どこで躓くかは生徒によって違うからだ。

取組全体を通して「教員と生徒の関係性」を更新することも狙っている。

「生徒主体で言葉を学べるようにしたいんです。生徒の協同的な学びも増えまし

取材・文／松井大助　撮影／辻 吉裕

図1 授業における生成AI活用の個別サポート

発問・指示のサポート	AIに生徒が求めていることとそのアプローチの妥当性の確認	「何を知るために（何を作成するために）、AIにどんな指示を出している？」「何がうまくいっていない？」
	生徒の考えたアプローチの承認／改善策の提示／別のアプローチの提示	「その指示の仕方、いいね！」「それを求めるなら、より具体的にこう指示したら？」「その点について回答が欲しいなら、ほかにこういうやり方もあるかもね」
判断・選択のサポート	AIの作成した回答の「正しさ」や「本人にとっての適切さ」を問う	「これって正しいの？」「AIが正しいわけじゃないから『変えたい』ところは変えないと」「AIが打ち出した文章の中から、自分に合った言葉を選ぶことが大事やで」
	生徒の判断・選択を深掘りして意図を明確化→自分の言葉をつくる	「なんでここは『AIがおかしい』と思ったの？」「（複数のワードから）この言葉を選んだ理由を聞いてもいい？」

図2 指導者と学習者で進める教育（銀行型教育）

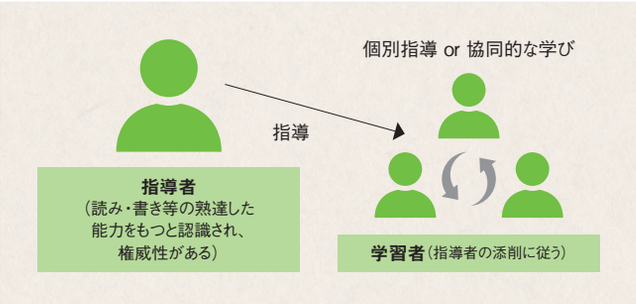
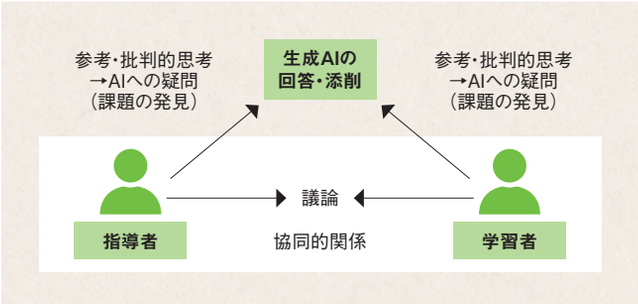


図3 AIと指導者と学習者で進める教育（問題解決型教育）



たが、教員と生徒の関係は『教員が指導し、生徒が教わる』という構図でまだ固定されています。言葉の使い方や話の構成について、教員の私が提案や添削をすると、生徒はそれを無批判に受け入れてしまうところがあるんです」（図2参照）

いうなれば、生徒が自分に合った言葉を獲得していくのでなく、指導者のもつ知識をそのまま頭の中に貯蔵していく状態。教育者パウロ・フレイレのいう銀行型教育に陥りやすいことに、早野先生は課題を感じていたのだ。それでは「言葉を自分のものにできない」と。

そんななか、言葉の学習に生成AIを活用すると、ある変化を起こせたという。「生徒は文章作成にも生成AIを活用するのですが、その過程で『AIの提案に、生徒が疑問をもつ』『AIの提案から、生徒が好きなものだけ選び取る』という機会を作れたのです。AIに異を唱えるのは、教員に物申すより、心理的抵抗が少ないからですね。そしてその生徒の判断・選択について『なぜあなたはそうしたいのだろう？』と教員が一緒に議論を交わすと、教える・教わるの構図から抜け出し、協同的関係のなかで『生徒が自分らしい言葉や表現を探究する』のを手助けできると感じたのです」（図3参照）

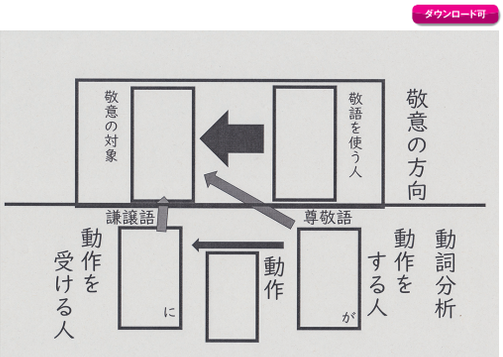
では、そうやって生徒が言葉を自分のものにしていくと、何が起きるのか。

その先で味わえる感覚の一端にふれてもらおうと、早野先生は4月の最初の授業で、生徒にいつもこう投げかけている。「夕日が沈んでいくときの空の色って、何色というか知っている？」と。

続いて「茜色」という日本語にしかない表現を伝え、その言葉を生徒の実体験、夕日を眺めたときの情景と結びつけてもらうように促す。すると、以降は夕日を目にしたときに、赤色でも橙色でもない「茜色」を感じられる。また、「茜色の空」という言葉を読むだけで、頭の中に、目の前にないその世界が作られていく。つまり、言葉が自分のものになると、「その言葉を通して世界をより深く知ることができ、想像や思考の幅も広がる」のだ。

「言葉は、教師から学ぶだけでは身につきません。『嬉しい』も『つらい』も、そう言い表したいことを体験し、その言葉を使うなかで理解が深まり、自分のものになると思うのです。その過程では、例えば『林檎』という言葉に特別な意味を抱くようになる人もいますよね。実体験と結びつく言葉や、自分の歩みのなかで重みをもった言葉。そうした言葉を生徒が自ら発見し、その言葉を使って世界や人生のことを考えてほしいと思っています」

ダウンロード可



「古典探究」の敬語学習のスライド。20枚以上あり、早野先生から校長先生への敬語など、現代との結びつきも見える内容になっている。

ワークシートの設問についてタブレットで調べる。「生成AIに聞くと、関連情報まで出してくれるのが結構面白い」という生徒もいた。

個々の作業を早野先生も支援。設問の答えは知っていても、そこに生成AIでどうアプローチするかは定まっておらず、生徒と一緒に考える。

ダウンロード可 ※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス（Vol.458）

早野先生の作成したワークシートに挑む生徒。ネットや生成AIを使って「自分で答えにたどりつこう」と奮闘し、学びも深めていた。

個人ワークだが生徒同士の相談もOK。話に花が咲き、時間内に課題を終えられなかったら、自分の責任で遅れを取り戻すのがルール。

授業ができるまで

近づいたり離れたりしながら教師のあり方を考えて

早野先生の「教師に対する思い」は、なるまでのあいだに二転三転した。

高校生のときは「教師になって部活動に関わりたい」と思っていた。自身の高校生活がソフトテニス部一色だったからだ。

だが、後回しにした勉強のために2年間の浪人を経験すると、考えが変わる。苦手だった勉強をやるほど知識がつき、世界が広がり、「教師だけに進路を絞らず、民間企業も含めて自分を最大限生かせる道に進みたい」と思うようになるのだ。

教育実習を経験した後もその延長線上にいた。勉強への拒否反応が強いクラスで、常にうつ伏せの生徒と関わり続けた。最後に「先生だけは見捨てんかった」とお礼の手紙をもらい、感動した。でも、それ以上に暖簾に腕押しだった日々が堪えて、「教師は続けられない」と思う。

民間企業に就職しようと分析を始めた。「他人の作ったものを売るのは身が入らなそう。自分で質のよい商品やサービスを作り、反応ももらえる仕事がいい」。そこで、はたと気づく。教育実習では「自分の授業の質が低かったから、よい反応を引き出せなかったのではないか」。もう一度、教師を目指したくなった。そのためには「もっと学ばなあかん」と自覚した。

だから大学院に進み、国語教育や学習理論を研究した。教育の課題を考えるうちに、どの学校でも、生徒から教員までが同じことに悩んでいると思うようになった。大半の生徒が、勉強を嫌々やっていたり、苦手に感じていたりすることだ。

「生徒が主体的に学び、学ぶことが楽しいと思えるようにしたい」

そうした思いをもって、教員になった。

目の前の生徒が楽しく学べる環境を

教員になってからは、現場の学習環境にやや戸惑った。黒板に向かって机が並ぶ、数十年前と変わらない教室の風景。

「1対多数の一斉学習より、1対1や個別最適の学びのほうが、生徒の興味関心、意欲は高まりやすい。先人の研究者たちはそう言い続けているんですね。この環境に甘んじていいのかな、と思ったんです」

できることを探り、前任校では、司会のいるバラエティトークショーのような授業を目指した。生徒から出てきた意見を広げて、話をぐるぐる振って別の意見も引き出し、題材についてさまざまな解釈を皆で楽しんだうえで、受験に備えて基本の見方も押さえる、というように。

現任校では、勉強に苦手意識をもつ生徒がより多く、作り込んだワークシートを基に、まずは個別に作業して「自分で答えにたどりつく」取組を優先した。

そこに生成AI普及の波が押し寄せる。岐阜県では、教育委員会が生成AIによる添削システムを導入し、これを活用する学校を募集した。早野先生は関心を示した若手の先生たちと一緒に手を挙げ、保護者の同意も得て、授業に取り入れた。

志望動機を書く授業に、生成AIの添削を活用すると、生徒から相談があった。

「ここ、AIに『ました』を『ます』に直されとるやんか。おかしくない？」

話し合ってみると、AIが『前文との時制の一致』を図ったのに対し、本人は『前文の主張の理由付けの文』にしたかったことが見えてきた。AIに生徒が疑問を呈し、教員の自分がその課題を一緒に考える。そのことに、わくわくした！

INTERVIEW・教科を越えたつながり

勉強に苦手意識のある生徒でも挑戦したくなるような授業を

化学
大野貴也先生

――早野先生とはどんな関わりがありますか。

生徒の進路で連携しています。早野先生が進路指導主事で、僕が3年の担任だからです。早野先生は、志望動機の作成を国語の授業でしてくださって。おかげで担任の添削量が減りました。生徒は生成AIも使ったわけですが、AI任せでなく、『自分のことを上手に表現する』ための道具として使えていたと思います。

――早野先生の授業の取組で共感していることや、見習いたい点などはありますか？

共感しているのは、下にそろえる授業ではなく、生徒の個々の力を伸ばす授業をされていることです。本校には勉強を苦手とする生徒が多いですが、とはいえ得意教科のある生徒もいます。授業で簡単なことだけ課すのは良くないと思うのです。自分の担当する化学の授業でも、自信のない生徒向けの基礎の課題と、そこは理解した生徒向けの応用の課題を用意し、基礎にじっくり取り組んでもいいし、応用に挑んでもいい形で進めています。

ただ、僕はまだ生徒に「やらせる」感じ。早野先生の授業を見学したら、生徒が生成AIを使って自分からやる気になっていたんです。生徒のやる気を引き出すのが本当にうまい。その姿勢を真似ていきたいと思っています。

不破高校（岐阜・県立）

School Data

創立1950年
普通科
生徒数180人
（男子98人、女子82人）
進路状況（2026年3月卒業）
大学8人、短大8人、専門学校10人、就職36人、その他0人

Outline

校訓は「あかるく　さとく　たくましく」。2025年度より、月に一度水曜日を午前授業にし、午後は生徒が自ら選択した活動をする「不破ウィーク」を実施。学校企画への参加も家族や友人との団らんもできるようにし、生徒の主体性を育んでいる。

生徒はこう変わる

言葉を使った探究を教員と一緒に楽しむ

生成AIでも何でも使って課題に取り組む授業を進めていくと、生徒たちには二つの変化が見られるようになった。

一つは、「難しい！」「終わらん」などと「学ぶことのしんどさ」を口にするようになったこと。もう一つは、にもかかわらず、以前はすぐ投げ出していた生徒も含めて、皆が課題を仕上げてくれるようになったことだ。ときには家に持ち帰ってまで。早野先生はそれが嬉しいという。

「苦労の先にある達成感を楽しんでくれるようになったのかな、と思うんです。ゴールまでたどりつくことで成長を感じたり、懸命にやるなかで何かが生まれそうなわくわく感やドキドキ感を味わったり」

実際、生徒たちは自分の成長を感じているようだ。物事を学ぶこと、言葉を学ぶことについて、1年間を通した授業の感想には、次のような声が寄せられた。

「自分で調べることができるようになった。ここは書かなくていいなど、自分で判断し、文をまとめられるようになった」

「たとえ関心がなくても、本気で調べれば知識が広がり、興味も出るのだと学んだ」

「AIを疑うことも大切なのだと気づくことができた。自分の知っている言葉で伝えたいことをどう表現するかを学んだ」

「自分を見つめて、足りない部分や伸ばすところを再認識して、成長できた」

早野先生にとって一番楽しいのは、そんな生徒たちと「お互いに知らないことを、疑問として共有したとき」だという。

「『先生これどういうこと？』『いや俺もわからんわ』みたいな。その瞬間は年齢も立場も関係なく、同じ地平に立って同じ水平線を眺めているんですよね。その先にどんな島があるんだろう、と互いに目を凝らし、一緒に船をつくって探索しに行くのは、本当にわくわくするし、それこそが学問の楽しさだと思うんです」

個別に生徒と関わる早野先生。生成AIの学習支援もあり、教員は「生徒の思考や探究を促す」分野に集中しやすくなったと感じている。

生徒INTERVIEW

自分と先生とAIで補い合って一緒に学ぶのが楽しかった

――国語の授業でどんなことをしましたか？

藤原さん　古典の調べものとかにAIを使うんですが、「やり方違うかも」と思うことも早野先生は「やってみよう」と肯定してくれます。それでいて普段は、私たちと口論というか、意見の言い合いもします。「自分はこう思う、みんなはどう？」って。

渡邉さん　志望動機を書きました。地元の小学生のための企画をしたら楽しくて、教員に興味をもった時期で、その気持ちをAIや早野先生とやり取りして、考えをまとめたんです。その次の地域プレゼンの授業では、私、勉強が苦手なのに、発表スライドに独学で音楽まで入れることができました。

――授業で成長したと思う部分はありますか？

藤原さん　自分の力と先生とAIで補い合っていいものを作る面白さを学びました。看護師を目指す私のことを、先生は自分のことのように考えてくれた。AIは、間違えることもあるけれど自分にない言葉の選択肢をくれた。意思を明確にして、自分を表現することができるようになったし、それが楽しかったです。

渡邉さん　逃げずに挑戦するようになりました。あと、学校の先生は私の中でずっと「一つ壁がある存在」だったけど、「一緒に学ぶ」ことができるのだと知りました。春から大学で教員を目指します！

左より3年生の藤原タンヤさん、渡邉麻央さん

授業作りのポイント

- **さまざまな言葉を自分のものにすることで、この世界を広く深く知ってほしいです。古典から現代文まで、文章を読んだときに頭の中に作られていく豊かな世界も楽しめるようになってほしいと思っています。**
- **自分で学ぶことができるという自信と、探究するのが楽しいという実感も、ぜひ手にしてほしいです。**

\ Point.1 /

手にした言葉を自分のものにする

言葉を自分のものにするには、生徒がその言葉を使って認識・表現したいものを見出すことが大事。だから今まではメモを取る、要約するなど「言葉を書く」活動を重視してきたそう。自ら選んで記した言葉こそ、体に染み込む。

\ Point.2 /

言葉の記述のほか「選択」も重視

人間が言葉をすべて書かず、生成AIに下書きや添削をさせる時代に。それでも言葉を自分のものにできるよう、今の授業では、文章作成に生成AIを活用しつつ、AIの提案から生徒が「言葉を選択する」過程も重視している。

\ Point.3 /

学習の題材の引力を探す

古典の読解では、単語の学習などで生徒をその世界に「近づける」だけでなく、生徒がその世界に「吸い寄せられる」引力も探している。例えば、現代にも通じる「敬語から透ける人間関係」を読み解くと面白いのでは？などと。

\ Point.4 /

ルールを共有し安心して学び合う

チャイムで始まりチャイムで終わることを、教員がまず徹底し、どんな事情にせよ開始が遅れたら生徒に謝る。立場は違ってもルールの下では対等であることを示し、互いを信頼し、安心して学び合える環境を目指している。